慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	M・フリードマン著 実証経済学の方法論
Sub Title	Milton Friedman, The Methodology positive economics
Author	富田, 重夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.9 (1955. 9) ,p.723(73)- 726(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19550901-0073
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550901-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第　2　表

總所得と總貯蓄

	第一百分位の高額所得者			第四、五百分位の高額所得者	
	總所得の割合	總貯蓄の割合	貯蓄性向	總所得の割合	總貯蓄の割合
	%	%	%	%	%
1919	14.0	42.10	5.9	5.3	21.60
20	13.6	41.86	5.7	5.3	21.60
21	16.2	43.06	7.0	6.5	25.40
22	15.6	42.84	6.7	6.8	25.80
23	14.0	42.10	5.9	5.6	22.80
24	14.7	42.48	6.2	6.0	24.00
25	15.7	42.88	6.7	6.4	25.00
26	15.8	42.92	6.8	6.3	24.60
27	16.5	43.15	7.1	6.3	25.00
28	17.2	43.34	7.4	6.6	25.40
29	17.2	43.34	7.4	6.2	24.60
30	15.6	42.84	6.7	6.7	25.40
31	15.6	42.84	6.7	7.4	27.00
32	15.3	42.72	6.5	7.5	27.35
33	14.4	42.33	6.1	7.6	27.35
34	13.6	41.86	5.7	7.1	26.20
35	13.6	41.86	5.7	6.8	25.80
45	9.5	38.40	3.6	4.0	17.00

$=\frac{k(1-a)}{1+k}(1-R)$　kとaとが凡ての所得に對して同一の値をとるとすれば高額所得者から少額所得者へ移行するに從つてrは累積的に小となり、(R′−R)の變化額は大となる。第二にkの値が一定ならばaが大となるにつれて貯蓄率は小となる。第三にaの値が一定ならば貯蓄率の變化はkと共に變化する。實質所得が減少する時には少額所得に對しては消費は非彈力的、高額所得に對しては彈力的となるからこれ等の理由は比較的良く妥當する。

第二の理由は高額所得者に對しては消費は彈力的であり資産の大部分がこの層に集中していることを擧げ得る。好況によつてこれ等の資産が增加し高額所得者の消費は一層刺戟される。投資の增大の印象が殘り樂觀的傾向が起り實際の資産價値以上に消費する。第三に特殊の型の所得變化は短期においては所得水準を異にするにつれて貯蓄率の變化を生み出す。農家と非農家の貯蓄率の差はこの理由から說明できる。しかし企業家の場合には一般消費者よりも貯蓄率は高くなり、不況時には農業企業のウェイトは大となり好況時には低くなる。そのため不況時には貯蓄率が高まり、國民經濟全體について考えたときの貯蓄性向の安定性に役立つのである。

以上が第一編から第三編までの要點であるが、第四、五編は主として資料の問題で第七章連邦政府の所得稅收入のカヴァレーヂ、第八章基礎的諸變數（産業別人口）、第九章所得範圍の調整、第十章分類の調整、第十一章評價の信頼度となつている。前述の貯蓄性向安定性に關する議論の外は殆んど資料的なものであるが、稅務統計や消費統計を集大成して一二六に亙る詳細な表を作成し實態把握に努めた點は大いなる收穫であると云わねばならぬ。ただ消費性向の議論では一人當り最高所得階級が一萬ドルで止まつているのは、アメリカとして果して十分なものであろうか。わが國においても高額所得者の家計調査の實施が望まれる所以である。（鈴木　諒一）

M・フリードマン著

『實證經濟學の方法論』

Milton Friedman, The Methodology of Positive Economics.

(Essays in Positive Economics, Part I, pp. 3—43, 1953.)

玆に書評しようと思う論文はミルトン・フリードマンの實證經濟學論文集の第一部序論として書かれた實證經濟學の方法論に關するものである。云うまでもなく近代の科學と云われるものは何らかの意味で實證的でなければならないと云う事をその根本的前提としている。諸事物、諸現象を如何なるドグマからも離れてそのものに即してあるがままに觀察し、これを分析、判斷し、推論すると云う實證的精神が近代科學なる知識の體系を生じたのである。それ故に經濟學の諸々の研究分野における認識もすべて實證的認識たるの性質を有するものと意圖されている。併しここでフリードマンが實證經濟學と云う時、それは所謂近代經濟學的經濟理論を意味して居り、從つてかかる經濟理論の方法論的考察をなしているものと解する事が出來る。勿論彼の論文は一論文であつて、その全般を盡くすものではない。彼がこの論文で特に明らかにしようとしている論點は、先ず實證科學とは如何なるものであるかと云う事、次に實證科學の理論或は假說のもつ假定 assumption なるものは如何なる性質と意義を有するものであるかと云う點である。彼は先ず實證科學を規範科學及び技術から區別する周知の論議をなし、前者は後二者から獨立して、"what is," に關する問題を取扱い正確な豫言をなしうる法則の確立を目的とするものであるに對して、後者は前者から區別されながらもそれから獨立ではあり得ないと云う。而して現代の歐米諸國においては、經濟政策についての相違は、その根本的な價値目標の相違によるよりも、むしろ或る政策の經濟的效果についての意見のそれによるものであつて、從つて實證經濟學の發展によつてのみ經濟政策上の一致が達せられるものとなし、實證經濟學の重要性、その優位性を主張している。然らば彼の實證科學とは如何なるものであるか。彼によれば、「實證科學の窮局的目標は未だ觀察されざる現象について妥當な、そして有意味な（即ち自明ではない）豫言を生ずる〃理論〃或は〃假說〃の發展である。」而してこの理論或は假說なるものは、二つの要素から成立している。即ち一つには「體系的な組織化された推理方法を助長せんと企てられた言葉 language」であり、他方それは「複雜な現實の本質的な特徵を抽出せんと企てられた實質的假說」であると云う。又彼は云う、「假說は二つの部分から構成されるものと見做しうる、即ち第一にそれは〃現實の世界〃よりも單純な、そしてその假說が重要であると主張する諸力のみを含んでいる概念的世界或は抽象的模型であり、第二に、その〃模型〃が〃現實の世界〃の十分な表現と考えられうる種類の現象を明確にし、そして模型と觀察しうる現象とにおける變數或は

實體間の照應を指定する一組の規則である。」と。換言すれば理論とは論理的齊合的體系であると共に、經驗的實質的體系であり、先天的綜合命題である。言葉としては、それは如何なる實質的內容も有しない形式であり、「經驗的素材を組織化して、その理解を容易ならしめる爲の整理體系 filing system」として機能する。從つてその眞僞は形式論理學の規範に依つてのみ判斷され、又その有意味性卽ち特定の具體的な問題を分析するに當つて有用か否かは事實的證據にのみ依存する。他方理論を實質的假說として見るならば、「それが說明せんと意圖している現象に對する豫言力」によつて判斷され、その意味での眞僞卽ち妥當なものとして許容されるか、或は拒否されるかは、ただ事實的證據によつてのみ決定されうる。「假說の妥當性の唯一の重要な檢證はその豫言の經驗との比較である。」これは極めて一般的見解であるが、注意すべき事は、この事實的證據なるものは決して一つの假說を〝證明〟する事は出來ず、唯それを〝反駁〟し得ないと云うに過ぎないと云う事である。蓋し同一の經驗が二者擇一的假說を同時に確證しうる可能性が存する故である。同一の現象が異なる假說によつて同時に說明されうる事がある故である。理論をもつて現實の反映と考え、理論の法則は現實の法則を意味するとなす見解に對して、理論は現實を說明する爲の手段、現實の說明に有意味な、論理的に齊合的な體系と考える限りは、斯くの如く考えうるであろう。かくしてフリードマンは二者擇一的假說の選擇には恣意的要素が存し、〝單純性〟――豫言をなすに當つて必要な知識が少なくて濟む事――と、〝多產性〟――豫言がより正確であり、その妥當する範圍がより廣く、又將來それからより多くのものが生み出される事――に依る外はないと云う。所でかくの如く二者擇一的假說の選擇が經驗的證據による檢證によつて決定され難いと云う事は、特に社會科學においてはいわゆる〝照査實驗〟controlled experiment が不可能な事と關聯している。古典的なJ・S・ミルの方法論以來、よく云われている如く、特に社會科學においては或る特定の要因を抽出孤立せしめて、その運動及び效果を純粹に考察しうる如き實驗は極めて困難でありこの領域において重要な意味をもつものは「偶々生ずる經驗によつて與えられる證據」なのである。人爲的に構成される實驗ではなくして、自然によつて與えられるそれである。併し彼によれば右の事態は豫言と經驗との一致による假說の檢證と云う原理そのものを根本的に否定する障害ではなくして、實驗の統制される程度の差に過ぎないのである。唯、この實驗の困難と云う事から若干の考察を要する問題が生じて來る。一つは「純粹に形式的或は同義反覆的分析への後退が助成される」と云う事、次により重要な事柄は「理論的勞作における經驗的證據の役割についての誤解を助成する」と云う事である。後者に關しては元來經驗的證據なるものは二つの過程卽ち「假說の構成」の過程と「その妥當性の檢證」のそれにおいて重要な關聯をもつものであるが、彼によれば誤解の生ずる焦點は「假說が說明せんと意圖している現象」と云う言葉にあると云う。社會科學においてはこの種の現象に對する新たな證據を獲得し、假說の含意と證據の一致を判斷する事が、既に述べた如く困難である故に、假說の豫言の妥當性とその假說のもつ假定の現實性とは全く別の事柄であるにも拘らず、應々にして假說は含意と共に假定をもち、假說の妥當性の檢證としてその假定と現實との一致と云う事が考えられる事になる。そのよき例はいわゆる完全競爭の假定、或は極大滿足や極大利潤の追求の合理的人間の假定は非現實的と考えられ、それ故にかかる假定に立つ假說そのものの妥當性を否定する如き論議である。獨占或は不完全競爭の理論が問題とされた背後には完全競爭の假說そのものの經驗的檢證によるよりも、その假定の非現實性の故に、その假說を否定しようとする傾向が存している。併しこれは假定なるものの本質と役割を誤解した大なる誤謬であるとフリードマンは云う。彼の主張する所によれば理論において假定の演ずる役割は(A)論述の簡潔さをもたらす事、(B)假說の間接的檢證を容易にする事、(C)理論の妥當する諸條件を指定する事にあるのであるが、問題はこの最後のものに關聯している。假定がその假說の妥當する諸條件、諸環境を指定すると云う事は、かく指定された環境以外においてはその假說は妥當しない事を意味しているのである。併しこの事はその假定が非現實的であり、誤謬である故ではなくして、抑々その假說がそこにおいては作用 work しない故である。假定と云うものは「記述的には現實の不正確な表現」に過ぎないのであつて、むしろそれが非現實的となればなる程、その理論はより重要なものとなるのである。「少きものによつて多くのものを說明するならば、その假說は重要なものである。」理論の理論たる所以のものはかく非現實的な假定の下に、より大なる現實の說明價値を有する點にある。それ故に彼においては、假定について問われるべき事は、それが記述的に現實的か否かと云う事ではなくして、それが或る研究目的にとつて十分よき接近たるか否かと云う事になるのである。研究の目的から獨立に假定の現實性を問う事は意味のない事と考えられるのである。完全競爭の理論を以て非現實的假定をもつものと批判し、より現實的な假定に基づく理論が果してより大なる說明價値をもつているであろうか。

要するに假說の檢證はその經驗との比較によつてなされるべく、決してその假定の現實性によつて判斷されるべきではないと云うのがこの論文の最も重要な論點になつている。

さて以上のM・フリードマンの主張する實證的理論、及びそれにおける假定の性質と意義についての見解に對して若干の私見を述べよう。先ず彼の理論の性格は現實の說明と、その起るべき事態の豫言の爲の理論、卽ち手段としての理論である。それは現實そのものの表現としての理論ではなく、M・ウェーバーの理念型の立場に立つ見解である。而も既述の如く假定の現實性を假說の妥當性から切り離す考え方はこの立場をより徹底せしめたものと考える事が出來る。そしてこの見解には一半の眞理性が認められよう。蓋し如何なる理論もその假定によつて指定される實驗の場を離れては妥當しがたい故である。その限りにおいては、理論の妥當性はその假定の現實性によつて判斷する事は出來ない。併し乍ら全く假空の假定に立つて如何にして有意味な假說の建設が可能であろうか。特に社會科學の取扱う問題は歷史的社會の現象である。それは歷史と共に變化し社會の異なるにつれて異なる。かかる現象に關する科學の理論の妥當性を問題とするならば、又歷史的現實的妥當性を問わねばならないであろう。或る假說が或る指定された條件の下において如何に作用 work するものであろうとも、この指定された條件そのもの

の歴史的現實性が問題とされねばならぬであろう。若し彼の立場から、理論の有意味性卽ち現實の說明の爲の有用性によつて、かかる歴史的現實性が考慮されているとするならば、有意味な理論の假定の現實性が問題とならざるを得ないであろう。又彼の見解は社會科學と自然科學の類比的な立場に立つものである。その事は實驗の可否が兩科學を決定的に區別するものではないと云う考え方、及びいわゆる說明と理解とは原理的に兩科學を區別するに足るものではないと云う考え方において明らかである。その意味においては非ウェーバー的であり、むしろメカニカルな經濟現象の說明の爲の理論を方法論的に基礎付けるものと云えよう。かかる自然科學的社會科學觀は、前述の理論の歴史的妥當性を考慮しない見解と共に、歴史的社會科學としての經濟學の方法論としては當然批判されなければならぬと思う。彼の主張する如くならば、經濟の歴史的發展と云う現象は、その理論の中に入るべき餘地がなくなるのみならず、理論の發展そのものが單に「靈感、直觀、發明の創造的行爲」によるものと考えられ、歴史的現實の發展との相應關係を見る事が出來なくなるであろう。要するに彼の見解は最近の近代經濟學的理論の方法論的考察と云うべく、又そこにその限界が存すると思う。

（富田　重夫）

ユルゲン・クチンスキー著
高橋正雄・中内通明譯

『ドイツ經濟史』

ハンガリヤ出身のすぐれた思想家ジェルジュ・ルカーチは、その最近の著作「理性の破壞」(Die Zerstörung der Vernunft, 1954) の第一章、ドイツの歴史的發展の二、三の特徴について、の冒頭につぎのように云つている。「一般的にいうと、ドイツ民族の運命そして悲劇は、彼らが餘りにもおくれて近代の市民的發展に加わつたことに基づいているといえる……これまでの――近代の――ドイツ史にとつて決定的なモチーフは資本主義のおくれた發展と、そこから生じた社會的、政治的イデオロギー的なすべての結果とにある、ということを私たちは見出すであろう」[1]と。ドイツ資本主義のたちおくれと、その結果としてドイツ民族がになわなければならなかつたいたましい運命――二度の大戰にはさまれた短い安定期につづくおそるべきファシズム支配――については、すでにフリードリッヒ・マイネッケが、「ドイツの悲劇――考察と回想」――のなかで、更にいたましく說いている。ルカーチもマイネッケも、第一次大戰後に成立したいわゆるワイマール共和國の崩壞をもつて、ドイツ民族に宿命的な非合理主義が、一層その崩壞に拍車をかけたと主張しているかのようである。云うまでもなく、マイネッケの考え方――第一次大戰後、ドイツ民族がたどつた不幸な運命は、解きがたい謎と不幸な方向轉換に富むドイツの歴史にとつてさけがたかつたというその宿命感は、すでに彼の先輩であるヤコブ・ブルックハルトに見られたところであつた。「世界史における幸および不幸」(Über Glück und Unglück in der Weltgeschichte) を說くブルックハルトの思想には、ドイツの歴史の特殊性を世界史のなかに把握しようとする努力が見られるが、しかしドイツ民族がかつてたどつた破滅と戰爭への道は、果してさけがたい宿命であつたと云えるだろうか。

戰後十年、ムッソリーニとヒットラーは亡び、ファシズムはまつたくその姿を消したといわれているにもかかわらず、民主主義という粉飾のもとに、新しいファシズムはすでにその姿をあらわしはじめている。ファシズムが、ドイツにとつてもとよなき地盤であつたように、われわれの祖國日本にとつても、その危險がないとは云えないのではないだろうか。しかしながらドイツ型ファシズムとしてのナチズムを增大させた精神史的な背景が、ドイツの後進性と非合理主義であつたとしても、それはあくまでもひとつの條件にすぎない。もつとも基本的なモティーフは、ドイツ資本主義發展の特殊性のなかに求められねばならない。ユルゲン・クチンスキーは「ドイツ經濟史」(原書のほんとうの名は、「一八〇〇年から一九四六年までのドイツ經濟の動き」) ということこの書を通じて、ドイツ經濟の歴史的な發展を明らかにすることによつて、ファシズム出現の背景となり、そのにない手となつた階級の經濟的政治的な基盤を明らかにしている。

譯者はしがきによれば、ユルゲン・クチンスキーは、一九〇四年九月一七日、ドイツのエルバーフェルトに生れた。彼の父もまた經濟學者であつた。クチンスキーは、ベルリン、エルランゲン、ハイデルベルク、ワシントンの各大學に學び、經濟統計學者として活躍していたが、一九三三年、ナチスが政權をとり、やがて社會主義政黨や勞働組合を禁止するや、非合法運動に入り、三六年にはイギリスに逃れ、精力的な著述活動をつづけて、ファシズムと闘つた。第二次大戰が終るとともにドイツに歸り、四六年にはフンボルト大學（もとのベルリン大學）の經濟史の教授に就任し、現在に及んでいる。その著書は多く、最近出た「ドイツにおける勞働者の狀態の歴史」(Die Geschichte der Lage der Arbeiter in Deutschland, 1871—1932) をはじめ、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカなどの勞働者階級の狀態にかんするものを、數多く出している。本書は、つぎの十六講から成つている。第一講、なぜドイツ經濟史を研究するのでしようか、第二講、一八〇〇年頃のドイツ、第三講、經濟革命、第四講、進歩と反動、第五講、一八四八年の革命の經濟的政治的前史、第六講、初期産業資本主義の終り、第七講、ドイツ資本主義の第二期への移行、第八講、第一流の資本主義國としてのドイツ、第九講、獨占資本主義の第一段階、第十講、戰爭・革命およびインフレーション、第十一講、生産設備の近代化とファシズムへの發展、第十二講、ファシズム經濟の構造、第十三講、ファシズム經濟（一九三三—一九三七）、第十四講、ファシズム經濟（一九三八—一九四五）、第十五講、「新秩序」、第十六講、新ドイツ經濟再建の問題。以上の全部にわたつてその內容を紹介する必要もないし、またわたくしの目的でもないが、ただ、ファシズムをささえた地盤は